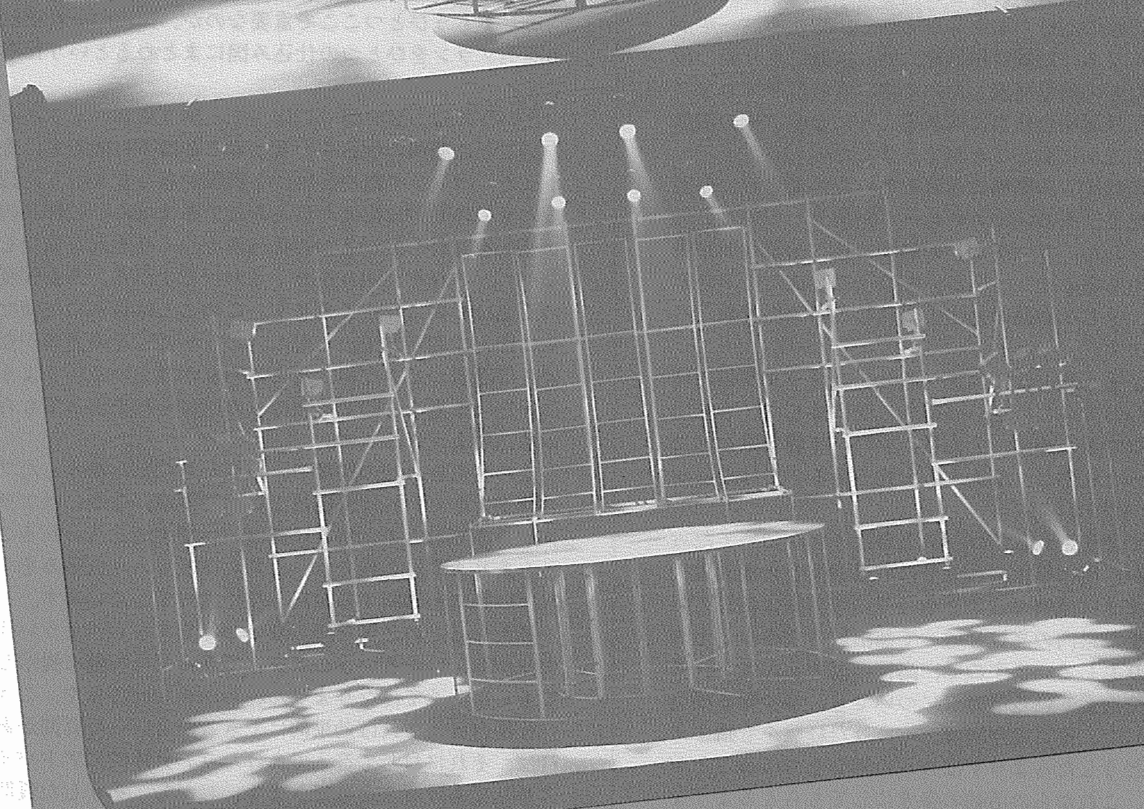


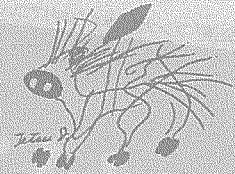
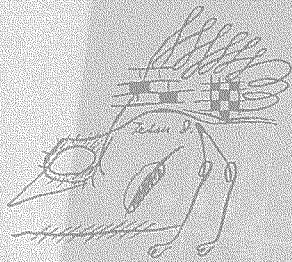
ぶきま伊原台舞の懐古写真

▼劇団青年座公演「ブンナよ、木からおけてこい」の舞台装置とライティング



- 高校演劇の舞台照明を考える——山崎一男
- 活躍する照明家にさく——中川隆一
- 光のエッセイ——飯島早苗・岡安伸治

高校演劇の舞台照明を考える



山崎一男 (榊長野舞台)

関東ブロック大会に携わって

1月16・17日の両日、長野県県民文化会館で高校演劇の関東ブロック大会がおこなわれました。関東各地から選ばれた12校の高校の演劇部が参加し、それぞれ一年がかりでつくりあげた舞台作品を、同じ演劇に取り組む他校の生徒たちの前で発表したのです。この関東ブロック大会で、私は照明の仕事に携わることになり、その活動の一端を間近かに見ることができました。

私も高校時代、演劇部に所属していたのですが、今回の舞台を見て、その演技力のレベルが向上していることに感心しました。アマチュアの劇団に比べ練習時間が豊富なこともあるのですが、なにより生徒たちの熱意とパワー、そして顧問の先生方の熱心な指導の成果だろうと思います。

しかし、そうした演技に比べると、スタッフ関係の仕事が追いついていないという印象も受けました。さらに良い舞台にするために、大道具、照明、音響効果などについてもっと勉強し、工夫する余地があるのではないかと思ったのです。

長野県で開催されるブロック大会は今回が初めてだったのですが、実は私はこれまでも県の大会や地区大会で、同じように照明の仕事を通して高校演劇に接していますし、また県内の高校を廻って部活動の指導などをおこなったりもしていますので、高校の演劇部が置かれている現状や抱えている問題点についても、多少知る機会がありました。そこで今回は、そうした経験をも踏まえながら、どうしたらよりすばらしい舞台をつくることができるか、これからの活動の参考にももらえるような視点から、舞台照明を中心に高校生の舞台づくりについて述べてみたいと思います。

打ち合わせについて

今回のブロック大会での私たちの仕事は、会場である長野県県民文化会館の職員の方と生徒たちの代表者と打ち合わせをすることから始まりました。

この打ち合わせの時に図面をもらい、それぞれの照明のプランを聞くことになります。ここではっきりしておかなければならないのは、照明のプランはあくまでも生徒たちがつくるということです。私たちは生徒たちがつくったプランを会館に合わせて、いわばアレンジして仕込んでいくことになります。

そしてもうひとつここで重要なのが、12校のそれぞれの照明プランをひとつの仕込み図にまとめるという仕事です。

というのは、2日間で12作品を上演するわけですから、作品ごとに照明の仕込みを変えることは不可能です。そのうえ、バトンの数や器材にも制限がありますので、12校の全ての要望に応えた仕込みはできません。12作品のプランを総合してひとつの仕込みをつくりそれを共用しながら、それぞれ明りをつくるわけですから、ある程度の妥協は必要になってきます。このことは最初に生徒たちに伝えておきます。しかし、どうしてもそのサスがなければ芝居ができない、そこに明りが欲しいというように特別に重要なものであれば、事前にそれを言ってもらい仕込むようにします。

この打ち合わせの段階で、生徒たちにしっかりしたプランができていれば問題はないのですが、なかにはプランができておらず、「明るければいいです。」と言われることもあります。これでは、こちらはどのような仕込みをすればいいのか判断する材料もなく困ってしまいます。

私たちはその芝居を知らないわけですから、どういう明りが欲しいかということ、できるだけ明確に提示してもらわなくてはなりません。わからないことや、こういう場合どうすれば効果的にできるかといった質問があれば、それに対して答えてあげたり、具体的にアドバイスをしてあげることもできます。しかし、そうした質問が出てくるまで照明について深く考えていない場合が多いようです。

少ないリハーサル時間

ともかく仕込み図ができあがりました。(図1)

私たちの次の仕事である仕込み作業が終わり、リハーサル日として15日が予定されていたので、12校全部

のりハーサルをこの日一日でやることになりました。1校あたりの持ち時間が45分。その時間内に道具を仕込み、明り合わせをやり、次の場面へ転換し、また明り合わせをやり、そして最後の道具のバラシまで終えなければなりません。この短い間に、生徒たちが求めるものを実際の明りでできるだけ出しながら、全体の明りをつくり場面ごとに記録していくことになります。

また、本番での調光操作は生徒たちにまかせますので、りハーサルの間にフェーダーの扱い方や操作の仕方を教えていきます。

このスケジュールですから、明りを出しながら通して稽古をするという時間的な余裕はありません。大きな初めての舞台、しかも整った設備のなかでのぶっつけ本番ですから、舞台に立つ生徒も、スタッフの生徒たちもず

いふんとまどったのではないのでしょうか。

本番での私たちの仕事は調光室で生徒についていて、わからなくなったり、困った時に助けてやること、それに幕間での色換えがあります。幕間の時間は15分。この間に色換えと当たりの直しをしなければなりません。さいわい長野県民文化会館は全部ライトブリッジ^①になっていたので作業はスムーズに進みましたが、そうでなかったらサスを下ろし、色を換え、当たりを直し、ボタンをとばして、竹ざおで調節することになり大変な作業になるところでした。なにしろ、12作品をひとつの仕込みでおこなっていますので、共用する器材の色換えや当たりの直しが大きな仕事だったのです。それを短時間で間違いないように確実にこなすためにつくったのが図2の表です。

図1 12校の作品のプランを総合してまとめた仕込み図

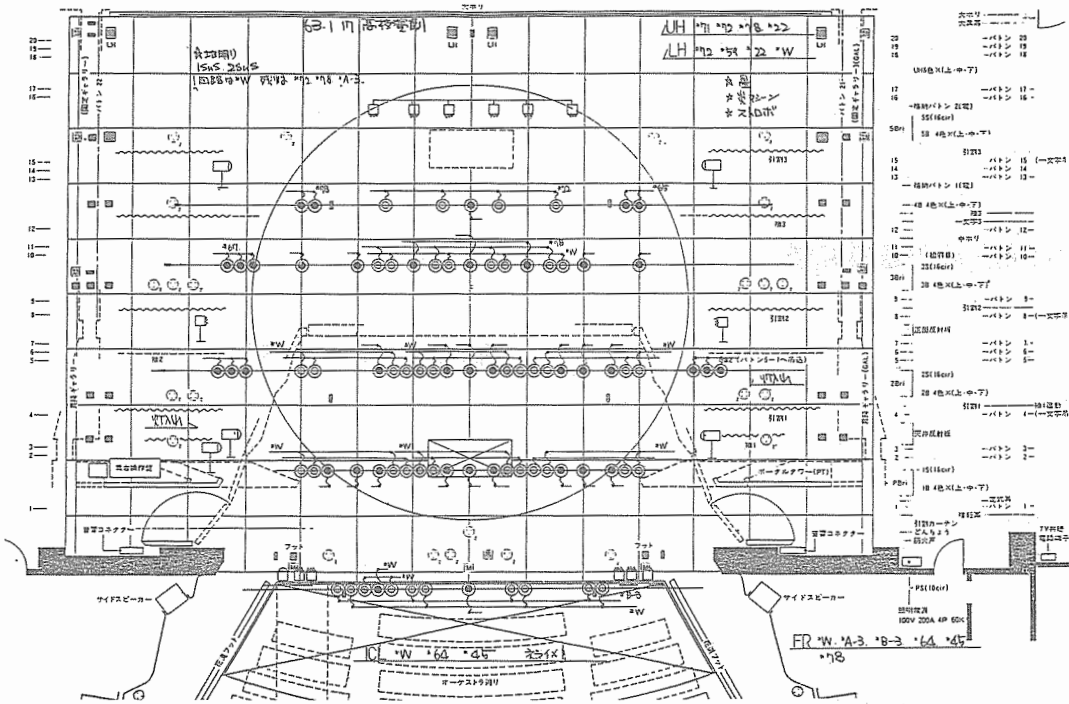


図2 色換えや当たりの直しのためのつくった表

	3Brj			2Brj			1Brj			SS	EF	
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨			
1 上田高校												± 2 x 1 DF x 2 (H4U下)
2 日立第一												CL 25 x 24
3 共栄学園												205 4177 101/20
4 日川高校												205 22 BFD-W 10W CL 22
5 宇都宮女子												205 22 BFD-W 10W CL 22
6 長野中央												205 22 BFD-W 10W CL 22
7 富士見												205 22 BFD-W 10W CL 22
8 船橋二和												205 22 BFD-W 10W CL 22
9 富士富西												205 22 BFD-W 10W CL 22
10 秩父農工												205 22 BFD-W 10W CL 22
11 光陵												205 22 BFD-W 10W CL 22
12 岩崎常備												205 22 BFD-W 10W CL 22

イメージした明りが出てこない

高校演劇では、演出を担当している生徒が照明のプランも考えている場合が多いのですが、明り合わせの時にあって、演出家の考えている照明プランがわたしたちに よく伝わってこないということがあります。

生徒が要求する言葉から、彼が何を欲しがっているのか大体的見当はつくのですが、実際に明りを出してみるとイメージしているものと違うというのです。たとえば、「うしろを赤くして、前を青くしたい」という言い方で生徒から注文を出されます。そこで、水平線を赤く染めて、地明りをブルーにすると、「思っているイメージと違う」というわけです。

演出家の頭の中にはあるイメージがあるのですが、それをどう説明していいのかわからない。考えているものがどうしたら明りとして出てくるのかわからないわけです。これまで実際に自分で明りをつくったことがないので、しかたがないのかもしれませんが、しかし、照明についての基本的な知識が充分でないことも、コミュニケーションがうまくできない大きな原因のひとつでもあるようです。

照明をつくるための基礎知識

そこで、照明プランを考える前に基礎的な知識として知っておく必要がある事柄について、いくつか具体的にあげてみたいと思います。

平凸レンズとフレネルレンズの違いを知る(*1)

スポットライトには平凸レンズとフレネルレンズの二種類があります。このレンズの違いによって出てくる明りが違うわけですが、平凸レンズを使うとどういう明りが出るか、フレネルレンズはどのような明りか、そして舞台ではどう使いわけていくかということを知る必要があります。

ボーダーライトでつくる地明りと スポットライトでつくる地明りの違いを知る

ほとんどの学校では、舞台を明るくするというとボーダーライトのナマ明りを下さいということが多いようです。また、ボーダーライトに青を入れて下さいというように明りをつくるメインとしてボーダーライトをまず考えているようです。ボーダーライトの明りでは、舞台が均一に明るくなって陰影が出てきません。これに対し、スポットライトで地明りをつくると、陰影のある立体的な明りをつくることができます。この明りの違いを知ることが必要です。

色の種類と使い方を覚える(*2)

舞台照明にはどんな色があるのかももう少し知識として知する必要があります。たとえば、プラン表でも具体的な色番号で書いてくるところはほとんどありません。打ち合わせでも「青が欲しい」「この場面は赤にしたい」といった要求の仕方です。それをどういう青が求められているのか、薄い青か、濃い青かをこちらで判断していくことになります。

また、舞台を赤くするのも、ローア・水平線ライトに赤を入れるのか、アッパー・水平線ライトを赤にするのか、フロント・シーリングライトから赤を出すのか、サスペンションライトに赤を入れるのかによって舞台の感じはずいぶん違ってきます。そういった違いがわからないために、抽象的に「この場面は赤にしたい」という注文になります。そこで私たちは、どこから赤を出して舞台を赤く見せれば演出家のイメージに合うかということ判断しなければなりません。

台本に書いてある照明のポイントを考える

たとえば、「月明りが窓から差し込んでいる」といったように、台本が要求している照明のポイントがあります。その明りをどういうふうにしたなら、具体的に舞台の上につくることができるか、そのやり方がわからないということもよくあります。

どの位置にスポットライトを吊って、どういうふうに出せば、月明りらしく見えるのか。また、それと付随して、その情景を効果的に見せるために道具はどう作ればいいのか。これらは、その台本を上演するためには大切なことです。

一枚のパネルを持ってきて、これは壁です。ここが窓です。というのではなく、もっと全体を立体的なものにしていかないと、照明の効果というものは期待できませんし、あってもなくてもいいようなものになります。芝居はやはり道具をしっかりつくるのが大切なのです。

暗転について考える

明り合わせの時に、生徒たちのイメージがなかなか伝わってこないということを述べましたが、その時彼らはその場面にどんな明りをつくるかということに熱心になっていたわけです。しかし、照明プランを考える時にもっと重要なポイントになることがあります。それは明りが動くところです。明りが動くところというと、たとえばフェード・イン^③であったり、フェード・アウト^④であったり、あるいはクロス^⑤して変化するところであったりするわけですが、高校演劇の場合は暗転と限定してもいいかもしれません。

高校生の場合、幕が開くと朝で、時間が経過して夕方になってその幕が終わるという芝居のつくり方はあまりせず、朝の場面、昼の場面、夕方の場面とつくり、それを暗転でつないでいくというつくり方が多いようです。ところが、仮にひとつひとつの場面の明りができていても、それを上手につないでいくということがうまくできません。

たとえば、ゆっくり暗転にするのか、速く暗転にするのか、つまりフェード・アウトなのか、カット・アウト^⑥なのか、そして次の場面はどう明りが入るのか、音を聞いてゆっくり明るくするのか、音に先行していきなり明るくするのか、フェード・インなのか、カット・イン^⑦なのか、そうしたことがきちんと考えられていないのです。

これは、単に明りの操作の問題ではなくて、演出上の問題でもあります。余韻をもたせて暗転にし、次の場面につなげていきたいというように、場面をどうつないでいくかと考えることは演出にかかわる事柄なのです。それは台本のなかで要求されていることで、芝居をつくっていきなかに自然と決まってくるのです。どういう流れで芝

居をつくっているのか演出がはっきりしていないと、暗転の時の明りの変化はあいまいになってしまいます。暗転による場面のつながりがはっきりできてはじめて、その場面の明りをどうするかを考えていくようにした方がよいでしょう。

この暗転が上手にできていれば、その間の明りが青なのか赤なのかということは、それほど問題ではなくなってきました。きっちりした芝居をすれば、それが朝の場面なのか、昼の場面なのかということは観客に伝わります。ですから、明りで雰囲気をつくるとか、心理描写をするといったことはあまり考えず、芝居をしっかりつくり、場面をつなぐ暗転をどうするかを考えることがまず大切なのです。

自分たちのアクティングエリアを持ってくる

初めて大きな会館で自分たちの芝居を上演する生徒たちにとって、どうしていいかわからないことも多かったのではないかと思います。しかし、道具の仕込みなどを見ている、大きな声を出し合いイキイキと動いていたのが印象的でした。

こうした大会で大切なのは、自分たちがいつも練習している間口で芝居を上演することです。クラブ活動で普段練習している場所はたいてい教室だと思えます。たまたま大きな大会ということで、文化会館のような広い舞台で芝居をすることになったわけですが、だからといってその空間に合わせて芝居をやる必要はありません。その会館に合わせて道具をつくる必要もないのです。自分

たちが常々練習しているアクティングエリアを、舞台上そのまま持ってくればいいのです。

アクティングエリアを持ってくるといっても、そのためには自分たちのアクティングエリアというものをはっきりしていなければなりません。これは後でも述べますが、自分たちのアクティングエリアを持つということは、実は普段どんな稽古をしているか、どう芝居をつくってきたかにかかわることなのです。たいていの場合、しっかりしたアクティングエリアができていないから、大きな舞台上に立った時に迷ってしまうわけです。

もし、自分たちのつくってきた芝居にとって、舞台間口が広いと感じれば袖幕⁸で狭めればいいし、奥が広すぎて困ったら中割幕⁹を使用することもできます。

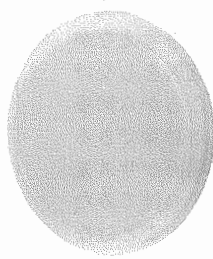
今回の大会でも、基本的には大ホリ¹⁰を使っていますが、どうしてもそれでは芝居ができないという学校があり、中ホリ¹¹を使った例があります。

舞台を見ている観客にとっては、奥行きに関しては大ホリでも中ホリでもそんなに違いは感じないのですが、演じている生徒からすれば、ずいぶん感じが違うはずです。稽古では三步歩いて道具にたどりついたのに、六歩歩かなければならなくなったら、芝居が全部違ってきます。プロの劇団でも、地方公演でいろいろな広さの舞台上で演じる時は、自分たちの間尺に合わせて演じているものです。

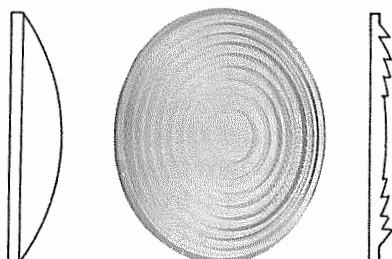
しかも、リハーサルの時通し稽古をやるわけではないのですから、会館の図面や資料を見て、その大きさや広さ、設備に惑わされなくて、普段自分たちのやっているものをそのまま舞台上に持ってくるという考え方が大切だと思います。

*1 平凸レンズとフレネルレンズの違い

平凸レンズでは限られた範囲に比較的輪郭のはっきりした投光が得られます。舞台ではこの特性を利用して、舞台上の一点を強調するためのサスペンション・ライトとして使ったり、ステージ・サイドに置いて演技者の上半身だけを狙ったり、道具に強いタッチをつけたりするときに使います。また、フォローとして、舞台上の演技者の動きに合わせて追いかけるスポットとしても使われます。フレネルレンズでは、投光面の中心が最も明るく、広範囲に輪郭のぼやけた投光が得られます。したがって舞台を広範囲にわたって明るくみせる時には適していますが、フロントやシーリングといった幕前やフォロー用には適していません。



平凸レンズ



フレネルレンズ

*2 色の種類と使用例

ここで紹介した使用例は一応の目安となるものです。この例にとらわれずに、実際に使ってみてイメージに合った色を選んでください。また、色をカラーフィルターのサンプルなどで選ぶ時は蛍光灯の光や自然光を通して選ばないでください。舞台照明の光源は白熱電灯ですから、実際に照明器具に入れた時に、イメージと違った色が出てくる場合があります。

カラーフィルターの番号と使用例

カラーフィルターの番号	色	使用例
No.16、17	ピンク	朝日、はなやかさ、あこがれ、花
No.22、24	赤	炎、激しい、血、太陽

No.31、33	濃いアンバー	夕日、晩秋
No.34	アンバー	行灯、ローソクの火
No.37、38	赤みのあるアンバー	夕陽の光として、朝焼け
No.44、46	黄色	はなやかさ、日光
No.45	ストロー	電灯、午後の日光、秋
No.55、59	グリーン	木陰、森の中、田園、若葉
No.64	ライトブルー	風の室内、屋外、雪、抽象的空間、涼しさ
No.67	ライトブルー	夜明け、朝などの光に、雪
No.65、76、78	ブルー	明るい空、月の光、夜の雪、影、寒さ
No.72	ダークブルー	夜の空などに使う
No.84、85	ヴァイオレット	激しさ、不安
No.87、88	パープル	幻想的ムード、甘美

道具との位置関係を明確にする

これは学校を廻っての指導の時に気がついたのですが、演劇部の芝居のつくり方を見ていますと、台本が選ばれると、まずキャストイングを決め、本読みをやり、立ち稽古に入り、芝居ができあがってから、さて道具はどうしようか、照明は、音響はというパターンが多いようです。つまり、スタッフサイドの仕事が後回しになっているのです。芝居が全部できあがったところで、裏のことを考えはじめのわけですから、道具をつくるという作業などたいてい最後になってしまいます。

前に述べた自分たちのアクティングエリアをつかんでいないという原因も、このあたりにあるようです。

道具をつくるのが最後になったのでは、稽古の時に道具と自分との位置関係を頭に入れながら演技をすることができません。ですから、いざ舞台に立った時に今自分はというところで芝居をしているのかがわからなくなるのです。

道具と演じる生徒との位置関係について稽古の段階から充分考えてあり、この位置にこういう道具があって、あなたはここで芝居をするんですよと演出できていれば、どこの会館にいても、道具との位置関係を見ながら立てるはずですが、それが充分できていないから、会館に来てはじめて道具はどこへ置こう、壁はどこだ、机はどこだ、私はどこに立てばいいのとなるわけです。

もし、稽古をはじめるときに道具ができていなかったら、かわりに机を置いたり、テープを床に張ったり、どんな代用品であってもかまわないから道具の位置を指定して、稽古を進めていきます。そういう稽古がきちんとできていれば、どんな会館に行っても、自分たちの芝居するエリアはこれしかないんだから、この中に明りを下さいと言えるわけです。

道具との位置関係がはっきりしていれば、照明に関してもどの方向からどういう明りが当たるのかを考えながら稽古ができます。たとえば、この範囲で芝居をしなければ明りは当たらない、いま立っているところから何歩前に出なければサスに入らないということが計算できるのです。本番の舞台で、暗転になり、次の場面がサス先行のフェード・インという場合にも、サスをつけてみたらそこに生徒が立っていなかったというようなことはな

くなるでしょう。

芝居のつくり方を再考する

キャストイングを決めて稽古を始めることと、スタッフの仕事は同時進行で進めるのが本来のあり方なのですが、現実には前に述べたようにスタッフの仕事が後回しになっているようです。そこでひとつの方法として、これまでとは逆のやり方で芝居をつくってみてはどうだろうかと思います。つまり、最初に道具と音響と照明を決めて、それをみんなでじっくり研究してから、芝居づくりは始めるのです。

台本が決定したらざっと読んで、ト書きにこの道具とこの道具が書かれているから、まずその道具をつくってしまう。それをみんなで研究して、照明はこうした方がいいとか、音はこういう音が必要だとか考えてから、役を決めていく。それから本をじっくり読み、セリフを覚え、芝居をつくっていても充分間に合うと思います。そのほうが全体の調和がとれて、うまくいくのではないのでしょうか。

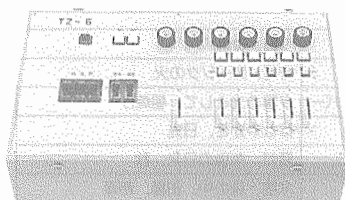
先に道具を作ったり、照明を考えたりすることで、自分たちがつくろうとしている場面全体がよくわかってきます。そのあとキャストイングされても、芝居の全体の流れの中で自分に与えられた人物の位置が見えてきますから、役をつくっていく上でも楽になってくるのではないのでしょうか。

現在のやり方を見ていますと、役を決めて、セリフを覚えなきゃいけないというのがまず頭にあるので、それを一生懸命やっているうちに他のことは忘れてしまっているようです。まず、みんなでスタッフサイドの目をもってその作品を読み、研究してみる。そうすると主役をやりたいとか、この役はイヤだとかそういうレベルではなくて、芝居をつくるおもしろさも醍醐味もわかってくるのではないのでしょうか。

最低これだけの器材は欲しい

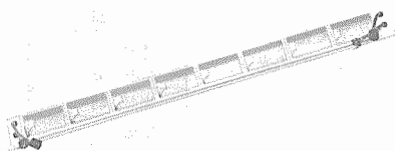
県内の学校を廻って部活動の指導をおこなった経験から言いますと、まだまだ充分な照明設備がある学校というのは少ないようです。各学校でそこにある器材を使っ

① ディムバックTZ-6型



講堂や体育館などでの公演に最適な可搬型の調光卓です。ディムバックシリーズにはTZ-6型のほかに、TZ-10型、TZ-15型の三種類がありますので、活動の規模や内容に合わせて選ぶことができます。

② CT型ストリップライト



白熱電球を使用した、軽量で取り扱いが簡単なフラッドライトです。ローアホリゾンライトとしてはもちろん、フットライトとして、また道具のうしろや切出しのうしろに縦横自在に取り付け、部分照明として使用することができます。

③ DF型500Wスポットライト



フレネルレンズを使用したスポットライトです。狭いスペースに吊り込んだり、簡単に移動することができますので、小ホールなどでシーリングライトやサイドフロントライトとして活用されています。

て、より効果的に舞台をつくる方法などを指導していますが、芝居をつくるためにはやはりある程度の設備は欲しいと思います。

それには予算獲得のために、顧問の先生に頑張ってもらわなければならないのですが、参考までに必要と思われる器材、設備について述べてみたいと思います。

まず調光のできる設備が欲しいと思います。ディムパック^①が一台あれば、フェード・イン、フェード・アウトの操作ができます。暗転で場面をどうつないでいくかということが普段の稽古の時から考えていけます。

次に、ローア・ホリゾントライト^②。ホリゾン트를染めることによって、朝、昼、夜といった雰囲気をつくり出すことができます。それに昇降できるバトンが一本。器材としてはD F型500Wのスポットライト^③が8台。そのほかステージスポットに2台、フロントに4台。ステージスポットとフロントの器材はC E C型の500Wのスポットライト^④で充分だと思います。これくらいの器材、設備があると学校の体育館を使って芝居ができますし、演劇部の活動だけではなく、文化祭などの学校の行事に有効に利用できるはずですよ。

演劇部の顧問はほとんど国語の先生が担当されていますから、台本を深く読み込んだりセリフとして声に出したりということは充分稽古されているのですが、演劇をつくるためにはその廻りにどういうものが必要なのかということについてはまだ理解されていない部分があるように思います。照明の設備や音響の器材、道具をつくる材料、そうしたものについてももっと勉強していただければと思います。

学校の行事に追われることが多く、忙しくて大変でしょうが、道具の作りかた、照明の当てかた、音のつくり方といったスタッフサイドの仕事についてもある程度先生がイニシアティブをとって生徒を指導していかないと、いつまでたってもいいものができてこないように思います。

廻りを巻き込むことも必要

また、演劇部だけでやるよりもいかに廻りを巻き込んでいくかということも大切です。同じ学校に音楽の先生も、科学の先生もいるわけですから、芝居で使う音楽を作曲してもらったり、簡単な調光器をつくってもらった

りと協力してもらうのもひとつの方法でしょう。既製の音がいやなら、コーラス部に歌を入れてもらうとか、ギター・マンドリンクラブにギターの演奏をしてもらうとか、高校演劇だからできる工夫がたくさんあると思います。大勢の人の協力を得るほど、その舞台は豊かになっていくものです。芝居をつくるというのは、そういう楽しさもあるのではないのでしょうか。

印象に残った舞台づくりに取り組む姿

今回の関東ブロック大会の仕事に携わって、さまざまな感想が残りました。たとえば、同じ高校といっても、ナマ明りだけの舞台をつくった学校があれば、60分の作品にキューが70くらいもある変化の多い照明プランを提出した学校もありました。これは、生徒のプランをプロの照明家が仕込み図とデータ表とにまとめたものでしたが、学校によってこれだけの差があるというのも驚きましたし、これから高校演劇がどのような方向に向かうのか考えさせられました。

また、仕事をしながらどこまで生徒たちの舞台づくりに踏み込んでいっていいものか、しばしばジレンマを感じることもありました。

しかし、わからないなりに一生懸命に取り組んでいる生徒たちの姿。作業している時の大きな声。一年間の稽古の成果を一回の舞台に集中していくパワー。それは一年中舞台の仕事に携わっている私たちにとっても勉強になるものがありましたし、感動的でもありました。芝居を通して、同じ高校生に何かを訴えようとするその姿勢は貴重なものだと思います。私も舞台に携わる一人として、そうした高校生たちの意欲ができるだけ素晴らしい舞台として実るように、機会あるごとに手伝っていきたいと思います。

最後に、これはこうした大会などを通じて同じように高校生の演劇活動に協力されておられる全国各地の照明家の方々へのお願いなのですが、どういうふうな生徒たちの指導にあたっておられるのか、その内容や方法、あるいは感想などをお教えいただけませんか。また、お手持ちの参考資料などありましたらぜひ拝見させていただければと思います。今後の高校生の舞台づくりに、より適切な力を添えていくためにもよろしく願いいたします。

◎C E C型500Wスポットライト



平凸レンズを使用したスポットライトです。軽量小型のスポットライトですので、サスペンションライトとして、また移動用スポットライトとして使用できます。

用語の説明

①ライトブリッジ

舞台上部に設けられたボーダーライトとサスペンションライトを併設したブリッジ。人が通り作業できるようになっている。

②暗転

舞台転換の方法の一つで、舞台を真暗にして場面を変えること。

③フェード・イン

溶明のことで、真暗な舞台から、次第に照明が入って明るくなること。

④フェード・アウト

溶暗のことで、明るい舞台から、徐々に暗くしていくこと。

⑤クロス

ある照明がフェード・アウトすると同時に、入れ替わるように別の照明がフェード・インすること。

⑥カット・アウト

一瞬で舞台の照明を消灯する方法。

⑦カット・イン

一瞬で舞台の照明を点灯する方法

⑧袖幕

舞台上手、下手のわきの奥が客席から見えないように下げられた幕。

⑨中割幕

舞台の中程にある左右に開閉する幕。

⑩大ホリ

舞台の一番奥に設けられたホリゾン。

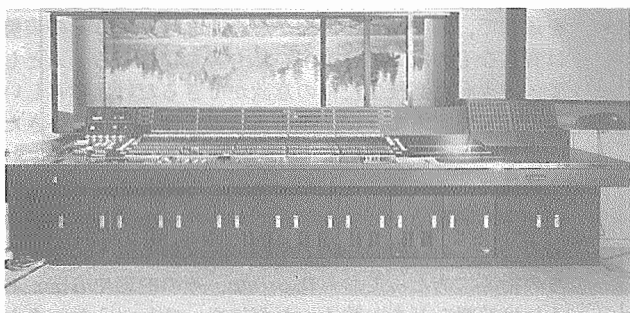
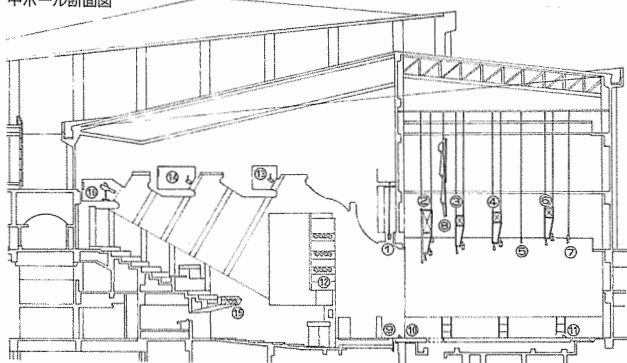
⑪中ホリ

本来はホリゾンとは舞台奥に設けられるが、舞台の中程に持ってきたもの。

長野県県民文化会館

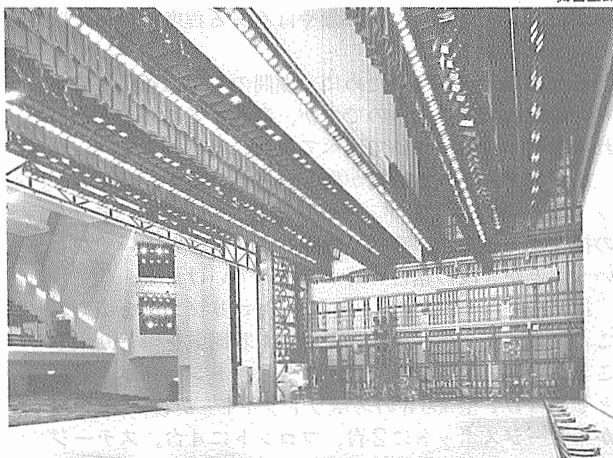
浅間山、白馬岳、木曾御岳などの美しい山々、そして裾野を彩る数々の草花、ムラサキ、コマ草、リンネ草、キキョウ……。この大自然にかこまれて文化活動の中枢を担っているのが長野県県民文化会館です。文化会館には大ホール(収容人員2173名)、中ホール(同1070名)、小ホール(同300名)があり、それぞれ公演の規模に合わせてさまざまな催し物に活用されています。今回、高校演劇の関東ブロック大会が開催されたのは中ホール。リハーサルを含めて3日間にわたる高校生の活躍を、MARUMOの光があたたかく包み込んでいました。

中ホール断面図



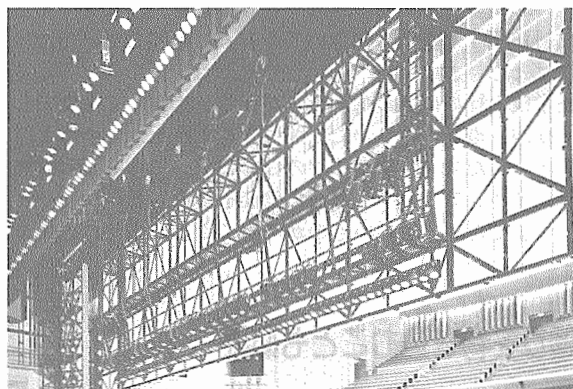
調光室

舞台上部



中ホールの照明負荷設備

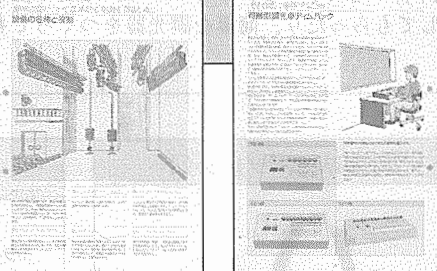
- | | |
|--------------|----------------|
| ①プロセニアムライト | ⑨花道フットライト |
| ②ポータルライトブリッジ | ⑩フットライト |
| ③第2ライトブリッジ | ⑪オーホリノントライト |
| ④第3ライトブリッジ | ⑫サイドフロントライト |
| ⑤第4ボーダーライト | ⑬第1シーリングライト |
| ⑥第4ライトブリッジ | ⑭第2シーリングライト |
| ⑦アップホリノントライト | ⑮VILCOーライト |
| ⑧天井反射板ライト | ⑯センターピンスポットライト |



ポータルライトブリッジ

MARUMOが提案する学校用舞台照明設備

MARUMOでは『青春のキャンパスはドラマティック……』のタイトルで、学校の講堂や体育館に最適な照明設備や器具についてカタログにまとめました。基本的な用語の説明や具体的な器材の紹介、施工例などが詳しく記載されています。ご希望の方は本社営業部までご請求下さい。



カタログの一部内容

プレゼント・コーナー

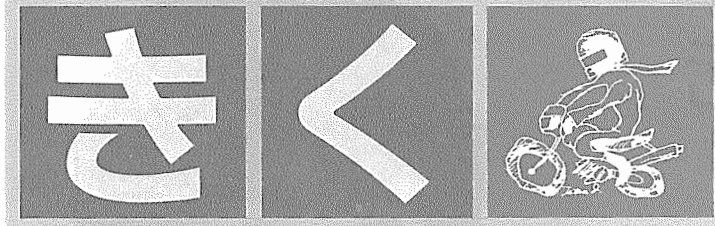
ご好評をいただきました63号のプレゼント『ビデオで見る演劇の基本と実際』(全3巻)の当選者は厳正な抽選の結果、岩手県上閉伊郡大槌町の佐々木寛志様に決まりました。おめでとうございます。なお、(株)ジャパン・ステージ・コンサルタントのご好意により、今回は『ビデオで見る演劇の基本と実際』から、〈第1巻〉舞台照明篇／発声訓練篇を抽選で3名様にプレゼントいたします。

ご希望の方はVHSかベーターのいずれかを明記し、下記までお申し込みください。

〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 丸茂電機株式会社
マルモ・ライティング・ニュース『プレゼント・コーナー』係

- 提供=(株)ジャパン・ステージ・コンサルタント
- 締切日=5月20日(金)

*『ビデオで見る演劇の基本と実際』の購入希望、お問い合わせについては下記のところへお寄せください。
(株)ジャパン・ステージ・コンサルタント 〒104
東京都中央区銀座2-14-5三光ビル TEL 03-546-0051



まず、芝居を見ることから

舞台照明をやろうと思って、知人の紹介で穴沢喜美男先生のところへ伺ったのが19歳の時。舞台のことは右も左もわからなくて、最初の半年くらいは先生が仕事をされている劇場へ行ってただ舞台を見ているだけでした。普通は照明の会社に就職すると、次の日には現場に行かされるものですが、ほくの場合は、先生に呼ばれて明治座や芸術座、宝塚劇場などに行き、通し稽古で仕事をされている先生のうしろに座って舞台を見るわけです。学生時代にアルバイトで照明をやった経験もなく、とにかく何も知らないから、まず舞台を見て芝居の方から入りなさい。今考えると先生はそういう心づもりで、ほくを劇場に呼ばれたのだと思います。

青年座スタジオ

その後、氏伸介さんにあずけられるというかたちで、氏が仕事をしておられた青年座のスタジオに行くことになりました。そのころ青年座のスタジオは貸し劇場として使われていましたので、いろいろな照明家の方がみえて仕事をされる。それを劇場付きのスタッフとして手伝っていたわけです。現場に入ってから、結構しごかれました。いわば、青年座のスタジオでほくは照明家として育てられたといえます。実は、このスタジオはバトンが固定されていて下まで降りてこないのですが、これも仕事を覚えるのに役に立ちました。たとえば、仕込み作業の時には脚立で上に昇りますが、一台のスポットを吊り、回路を取るには何を持って昇れば一回で済むかと考えるわけです。二又は何個、つなぎは何個必要かを計算して準備するようになります。サスバトンが降りてくる劇場だと、そんなことは考えず、まずスポットを吊って必要なものをその度に取りに行ったのですが、スタジオではそうもいかず、自然と計算するようになったのです。

ミュンヘン・オペラの衝撃

もう随分前のことですが、ミュンヘン・オペラが来日して東京・上野の文化会館で公演した時、スタッフの一人としてつくことになりました。これはとても貴重な経験でした。

大きな劇場で、しかもそれまで自分が見てきたものに比べて、はるかに規模の大きい催し物です。『ワルキューレ』でのスライドを多用した照明など、はじめて見るような明りも多く、非常に勉強になりました。なかでも、印象に残っているのが『バラの騎士』のサス合わせです。向うのスタッフがとんでもないところに明りを当てろと指示してくるのをとにかくその通りにつくっていったのですが、何を考えているのか見当もつきません。あとで

中川隆一

(AUライティングデザイン)

わかったのですが、舞台装置が大理石の建物として作られており、窓から入った光が床や壁に反射して、部屋の中に散っている状態をつくっていたのです。個々のサス合わせが終わり、全体の明りができあがった時、その舞台の美しさには感動しました。また、劇場に行っても何も仕事がないという日もありました。今日は装置家がバラの絵を描いているから、地明りだけつけてあげればいいというのです。外国のオペラの舞台にかけるとお金のすごさの一端を見たようで驚いたものです。

学校公演

学校公演で各地の学校を廻りましたが、そこで演劇部の生徒たちから何か相談を受けたり、アドバイスを求められたことは残念ながらありません。生徒たちは照明や音響のことに興味を持っているようですが、自分たちの考えていることより、難しいことをやっているように思えて近付き難いのかもしれません。これはほくらの方にも責任があるのかもしませんが、何かを聞かれた場合、説明しようとするとうしても専門的な言葉が出てきます。それがネックになっているような気がします。また、ほくらは仕込みなどの作業をしている時、スタッフ同士で怒鳴ることがよくあります。別に怒っているわけではないのですが、生徒たちから見るとそうした雰囲気に入っていけないのかもしれません。興味を持っている生徒には、舞台だけでなく、仕込みなどの作業を見せてあげたり、簡単な器具の扱い方を教えてあげたいと思うのですが、スケジュール的にもなかなかそうした余裕がありません。せっかく全国のたくさんの学校を廻り、生徒たちの間近で舞台をつくり、芝居を上演するのですから、演劇部の生徒たちの指導などもやっていければいいのですが……。

しかし、たとえば『ブンナよ、木からおりてこい』では、スポットライトをなるべく目に入らないようにしながらも、幕などで隠さないで観客に見えるようにセッティングしています。これはひとつには、芝居を見ながら、どういう器材がどんな方向から光を出しているのかを、興味のある生徒には見ることができるよう考えたからです。演じている役者の汗を身近かに感じながら、同時にそれをどんな光がどういふふうに見せているのか、そうしたことを知ることで、もっと生徒たちの芝居に対する関心が深まっていけばと思っているのです。

お手軽な異次元



飯島早苗

“光”はいつも、いちばん手近な異次元への入口です。

小さい頃、映画を後ろ向きで眺めるのが好きでした。

母が映画好きだったので、私はまだ字幕も読めない時分から名画座に連れていかれて、水っぽいアイスクリームを持たされ、妙に堅いシートに押し込められていました。

母は、文学少女で演劇少女で映画少女でした。詩人になろうと思って書き始めた詩は、小さな同人誌に二、三度載ったきりでやがて書かれなくなり、一生続ける意気込みで始めた演劇も、所属していた劇団が潰れたために挫折してしまいました。

故郷に連れ戻され、カタギになるように説得された彼女は、やけっぱちになって、

「わかったわよ。とにかく最初に見合いした人と結婚してあげるわ。誰でもいいから連れてらっしゃい。」

と宣言して臨んだお見合いで会った人と、本当に結婚してしまい、そして私が生まれたのでした。

やりたかったことを次々と失くした彼女に残されたことは、映画を見続けることだけでした。けれどもそれも、子供が赤ちゃんのうちはできない相談でした。だから私が、おとなしく座席に座ってられる年齢になると、すぐさま母は私を連れて映画館に通うようになりました。

けれど、『禁じられた遊び』や『天井桟敷の人々』が上映されている映画館で、小さな子供がじっと映画鑑賞をしていられるわけがありません。私は、すぐスクリーンを見るのに飽きて、通路をウロウロ歩いたり、ロビーに出ていったりする、行儀の良い観客でした。

ある日、いつものようにスクリーンを見ているのに飽きた私はふと思いつきました。

「そうだ、電車に乗ってて窓の外を見る時みたいに後ろ向きに座ってみたら何が見えるだろう。」

さっそく私は靴をぬいでキチンとそろえると、シートに後ろ向きに座ってみました。咎めるように母が私をちらりと覗きましたが、私はやめませんでした。

後ろ向きに見る映画は実に面白いものでした。暗い館内のいちばん奥の壁の小窓から、縞模様の光が扇形に広がって、そしてその光は、外国語の台詞や音楽と一緒にチラチラ動き続けていました。これが映画のカラクリなのかと私は妙に感心しました。場内を走る光をじっと見ると、その中には細かいホコリがチラチラと光りながらゆっくりと流れていて、それはとても不思議な眺めでした。

「あ、ここに人間よりもずっと小さい者の世界がある。」と漠然と感じました。光の中に、普段は見えない別の空間が確かに感じられました。



●(いじま さなえ)女優、劇作家。1982年、日本女子大在学中に女性7人で旗揚げした劇団「自転車キンクリート」で、制作、役者として活躍。劇団名の「自転車」は劇団が自転車操業であること、「キンクリート」は小さい子供が「てっこんキンクリート」と言えずに「てっこんキンクリート」と言ってしまう言葉の面白さを拝借したもの。舞台作品には、童話をもとにした『リンゴ畑のマーティンビビンソの2』や『シャンデリアトラブル』などがある。6月には『ほどける呼吸』を公演予定。

その時の感じが忘れられず、大きくなってからも、私は時々画面に飽きると後ろを振り返ってみることがあります。いつ見ても、無機質な光の縞模様が、暗闇を押しつけてスクリーンにドラマを投げかけ続けていて、その光の縞模様の中では、ホコリたちが光を反射しながら有機的に動き続けています。ただのホコリなんだとわかっていても、それはとても神秘的なものに見え、私のすぐ近くに違う世界の存在を感じさせるのです。

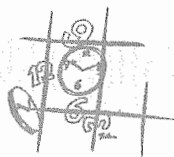
高校の頃のことです。私は友だちと軽井沢に遊びに行きました。かなり山に入った方で街灯もないので、夜になるとまわりは本当の暗闇になりました。真夜中に外に出て、隣近所を気にせず花火をしたりすることもできました。あるだけの花火に火をつけてしまい、懐中電灯をアゴの下からあてて誰かを驚かすというネタも使ってしまうと、私たちは次の暗闇でできる遊びを捜し始めました。

すると、ひとりが自分の持っていた懐中電灯の光を空に向けて、厳かに「ライト・サーベル」と言い放ったのです。

見ると、彼女の懐中電灯の光は長いビームになって真っ暗な空をどこまでも真っ直ぐ突き立っていて、本当に『スター・ウォーズ』のライト・サーベルのように見えました。他に邪魔する光がないので、少しの光線でもどこまでも届くのです。それからしばらくの間、私たちはその懐中ライト・サーベルを使ったお手軽SFXで、宇宙戦争の気分を味わったのでした。

今、私にとっていちばん身近な異空間は舞台です。暗い客席を前にして、あらゆる方向から交錯する非日常な照明がつくる舞台は、最も緊張感にあふれた異次元です。舞台裏が見切れないように吊られた暗幕がつくる、舞台との間に引かれた光と影の境界線を見る度に、あ、ここから異次元が始まっている——と思うのです。

油



岡安伸治

この3月に小豆島演劇祭・'88(3月25日~30日)に参加した。

その2日前の23日に、四国遍路の高松から琴平の金丸座を見学した。単線の琴電にゴトゴトゆられて1時間、改装工事のベニヤ囲いの琴平駅に着く。一刀彫りの視線にさらされ、とらやのさぬきうどんの香りの中を参道階段を登ること20数段、左手へ抜けて坂をあがると右手ののぼりの中に金毘羅芝居金丸座(1835年・天保6年)がみえた。

受付の小屋(入場料300円)に声をかけても誰もいない。重要文化財の芝居小屋へと向かう。正面の櫓の真下にある鼠木戸から声をかけるが、薄暗い中に返事は返らず、木戸をくぐって土間に入ると右手に通り札(チケット)を渡す札場があり、足元にサンダルとクツが各一足づつ。土間をあがり左手の下足場の前から鳥屋口(花道出口の揚げ幕の中の小部屋。役者が花道への出を待つところ)を通過して、本花道の中程へ来ると足元で何か話声が聞こえる。花道と舞台が接するところ、客席にはみ出るかたちで空井戸(現在の劇場では姿を消して無い。約半間四方の縦穴で、役者が急に飛び出したり、池や井戸に見たてて飛び込む)があって、そこから声がもれている。

とまどいウロウロしていると舞台下手奥に奈落(舞台床下)へおりの階段があり、そこからカイデンを手にして、はっぴをひっかけた小屋係の人が若い見学者を一人伴って出てきた。聞くと昼すぎから電柱工事の為に停電中との事。けがでもされたら大変なので、今日はもう見学を一切ことわろうとしていたところだという。わけを話して再度奈落へ案内してもらった。

少し湿ったようなひんやりとする真暗闇の中、電池の切れかかったカイデンの薄明りに直径四間の人動廻り舞台があった。4本の黒びかりする押し棒の一本を肩にあてて押して、24コの桎材のコロのきしむ音をこの耳で聞いてみた。花道の奈落へ伝わり人のささやく声にも似ている。

109席の桎のひとつ、ほの4列にすわってみると江戸時代同様、明り窓(照明代わりに外光を取り入れる客席左右の棧敷にある障子張りの窓で、この開閉によって場内の明るさを調節した)の明りの中に舞台があり、桎席をしきる板の上を売り子が歩く姿を思いうかべる事ができる。金毘羅様から民間の興業師に渡っていた頃は歌舞伎役者だけではなく、映画スターの片岡千恵蔵なんかもきたものですと語ってくれた。

江戸といわれた当時の役者の衣裳のあでやかさ、隈取りのありようがあらためて納得させられる。



●(おかやす しんじ) 劇作・演出家。劇団「世仁下乃一座」を主宰。この劇団名は東京・浅草仲見世通りの「余荷解屋(よにげや)(たき売りの店)の勇ましい呼び声につられてつけられたという。労働現場を舞台とし、一貫して社会の底辺で生きる人々に目をむけながら、ダイナミックで笑いとペースにあふれた作品を作り続ける。代表作に『別れが辻』(富山国際演劇祭で優秀賞受賞)、『仕掛花火』などがある。また、昭和60年には『太平洋ベルトライン』などの作・演出により紀伊国屋演劇賞を受賞。

28日は四国霊場の八十八ヶ所と同様、八十八ヶ所の霊場を持つ小豆島は農村歌舞伎を観劇。

段々畑の春日神社に向かって舞台は配置され、全体をこんもりした木々で囲まれている。奈落を窓からのぞくと金丸座同様の廻り舞台形式になっていた。見上げると楽屋窓からドローンで白塗りの子供達がこちらをニコニコしながら見ている。

池田町大字中山字杉尾1487の中山農村歌舞伎は、本来10月10日におこなわれるが、演劇祭の為に特別上演となった。ワリゴウ弁当に舌づつみをうち、小学6年生までで構成された『白波五人男』の舞台に声援を送って楽しくすごした。

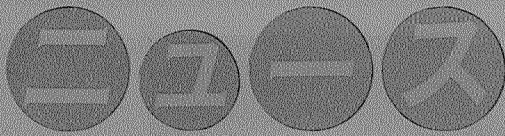
夕暮の山を背景に舞台は浮かびあがってくる。

昔、舞台前に油鉢という石の鉢を置いて、薪を焚いて舞台明りにしたという。この薪をゴマ木といい、春日神社の奥の院の森から集められた。そして舞台が盛り上がるとそれに油を注いでぱっと明るくしたという。いつの日からか大向うから「油!」「あぶら——!」という声が響くようになった。

大見得切った役者に掛け声がとび、春日神社をはったとにらみ、かっと開いた目にぱっと炎が燃え映る。

歌舞伎役者八代目市川団藏。幼児の頃より舞台に立ち、役者は肌に合わない、やめたいと言いながらとうとう84歳を迎えた。昭和41年4月、歌舞伎座にて引退興業。その1月後四国巡礼を終えて小豆島へ。6月4日午前零時発、小豆島坂手港より大阪行の船に乗る。

その日は小雨、闇の中に播磨灘をぼんやりみていた。するとそこに団藏の目にははっきりと空井戸がみえてきた。大向うから声がかかる。団藏は、くっと見得を切ると宙を舞って空井戸に飛び込んだ。再び大向うから声がかかる。「あぶら——!」。団藏のまわりに夜光虫が咲き乱れた。翌日、大阪港に船が着くまで団藏が入水した事を知るものは一人もいなかった。



学校教育のなかで舞台照明設備に対する関心が高まっています。神奈川県横須賀市の長沢中学校には、MARUMOの舞台照明設備が設置され、先生、生徒の間に大きな反響を呼んでいます。その様子が横須賀市教育委員会が発行する「指導課だより」に「特色ある学校づくり」として紹介されましたので、ここに転載させていただきます。

ステージをつくる楽しさ・演劇部の照明装置

特色ある学校づくり

「すごいっ！ 空みたいだ！」——初めて照明器具を使って、ホリゾントの美しい空の色が出たときの生徒たちの声です。

照明装置がそろう

2年前「特色ある学校づくり」の“演劇部の充実”を選択し、演劇だけでなく諸行事や集会などを盛り上げるためにも有効な、照明装置をそろえることになりました。

体育館内の配線工事から始まり、電気容量を考へて、調光器・500Wスポットライト6台・1kWスポットライト2台・ホリゾントライト一式を設置しました。

「照明係」の活躍場面がふえる

照明装置が整ったことから、照明係を希望する男子がふえ、女子ばかりだった演劇部にも男子が10名ほど入部してきました。

開校したころ、スポットライトすらなかったステージからうって変わって、この照明係が、演劇部の活動以外の場でも照明効果を出してくれました。文化祭では、生徒たちの創造力が装置の使用効果を引き出し、工夫をこらしたステージ演出によって大成功をおさめることができました。

学校の体育館のステージがもつイメージをがらりと変

えたこの装置は、予想以上に好評でした。

生徒会行事でも活用

教科との関連性がうすいので、教師側の研修がまだ不足しています。そのため装置をフルに使いこなしていないという問題点もありますが、生徒たちは、自分で電気容量を考えながら照明を組み合わせ、色をつくり、光量を調節しながらステージを演出する楽しさを覚えたようです。

この装置の使用効果もあって、演劇部は昨年に続いて市の代表として県の演劇発表会に出場しました。

教科学習とはちがった場面での活動を生徒たちは、とても喜んでいます。生徒会行事・卒業式・入学式等、活用場面が広がっているところです。

今後の課題

昇降装置がついていないので、ライトの位置や角度の調整、付け替えが思うようにできません。予算の面など問題はいろいろありますが、100%生かすためには、ぜひとも取り付けたいものです。

また、教師側の講習会をもち、操作のできる教師も増やしていきたいと思ひます。

(長沢中教諭 竹井美佐子)

演劇のおもしろさを知る

(1年 西塚佳子)

私は、いろいろな照明を使うのを見て、小学校にはなかった演劇のおもしろさを知ることができました。劇に出ている人の感情の動きにつれて、照明の色が変わります。楽しくなったり、悲しくなったり、また、寒さ暑さなども照明が表現します。まるで照明も劇に出演しているようです。

「すごいっ！ TV局みたい」

(1年 高橋真紀子)

初めてこの装置を見た時は、「すごいっ！ TV局みたいだ」と思ったくらいです。

私は動かすことはできないけれど、先輩たちがやっているのを見ていて頭が混乱してきます。とても難しくそうだけど、自分たちで使いこなせたらなと思ひます。

照明装置があるから入部した

(2年 三沢都夫)

ばくが演劇部に入部したきっかけは、照明装置があったからです。実際、最初に使ったころは難しく失敗ばかりしていました。けれど、けっこう本格的なもので、こういうのが好きなぼくにはやりがいがあり、最近ではほとんど自分で操作できるようになりました。今まで無趣味だったぼくにとっては、とてもうれしいことです。これからも、この照明装置でいろいろな舞台をつくっていききたいと思ひます。

やりがいがある

(2年 岡田美帆)

照明器具がたくさんあって、とてもやりがいがあります。なんとと言っても、舞台でたくさん色が出せて、劇が盛り上がったとき、私はとてもうれしくなります。

●発行——丸茂電機株式会社

〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03(252)0321(代)

●編集責任者——井上利彦

編集協力——小川昇舞台総合研究室 レクラム社

●マルモ・ライティング・ニュースは、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は、丸茂電機(株)までお申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。

●このニュースは弊社からお届けします。